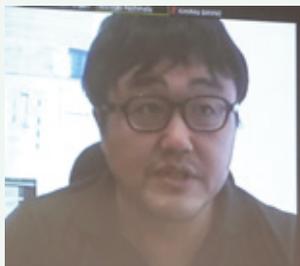


国際交流センターだより vol.7

「第3回 英語で学ぶ医学・看護学WEBセミナー」を開催しました

2月14日に開催した「第3回 英語で学ぶ医学・看護学WEBセミナー」では、シンガポール工科デザイン大学准教授の橋本道尚先生を講師にお迎えし「3D printing for soft and biological fluidic devices」と題して英語でご講演頂きました。当日は大講堂並びにZoomで同時配信で開催し、医学科3年生が参加しました。



シンガポールから講演中の橋本准教授

シンガポール工科デザイン大学 准教授 橋本 道尚

シンガポール工科デザイン大学の橋本道尚です。この度は貴大学セミナーでの講演の機会を頂きありがとうございました。私自身のキャリアを振り返ると、大学学部で留学した後に、学士入学で医学部に入学を目指すことも検討していましたが、紆余曲折あり研究者を目指すことになりました。医学系→理学系→工学系と自身の興味が変わっていき、現在は工学系技術の医療応用が我々の研究チームの研究の方向性になっています。20年経って、高校生の頃の自分の興味とまた繋がったのは面白いと思っています。

20代(あるいは30代でもそれ以降でも)自分はこれをやるべきだという思い込みにとらわれず、自由にいろんなことを試してみるのが良いと思います。医学・看護学の学位は非常に専門性が高いので、学生の皆さんが今までのご自分の経験や知識で想像できるよりも、もっと大きな可能性に満ちあふれていると思います。日本国内にも日本国外にも多くの機会が転がっています。誰も思いもよらなかったような将来を開拓して、私にも話を聞かせてください。

Webpage: www.fluidics.org / Twitter: @SoftFluidics

精神医学 准教授 牧之段 学

シンガポール工科デザイン大学の橋本道尚先生に講師の労を賜りました。橋本先生はマイクロ流体力学をご専門とされる方で、本セミナーの前半部では3Dプリンターによるデバイス作製の最先端をご紹介頂き、分野横断的な医工連携の大きな可能性を感じ取って頂けたのではないのでしょうか。後半部では、ご自身の経験をもとに海外留学の意義や価値を教えてくださいました。橋本先生は米国大学院学生会などの運営に携わり、後進の海外留学を熱心にサポートされてきた方ですので、本学学生にも国際的な舞台で学ぶことや働くことを選択肢をご提示頂きたく講演を依頼しました。橋本先生はSNSなどで度々「グローバル人材になるには〇〇が必要です」などと冗談交じりに発信されるのですが、実体験に基づいた助言は的確です。本セミナーに参加した学生たちがグローバル人材となる一助になったのなら幸いです。



牧之段准教授による司会進行

学生の声

医学科4年 吉田 暁彦

今回の英語セミナーを通して留学に対する考え方が変化したように感じています。橋本先生は、ご自身のしたいことの変化にともなって、様々な大学で研究されていました。このような主体的にキャリアを重ねていく姿に感銘を受けました。自分は英語が得意でないことなどの理由で、海外でキャリアを重ねることは考えてもいませんでした。しかし、橋本先生の講義を通して、将来海外で仕事や留学ができる機会があった際には、言語などの理由で道を断つのではなく、柔軟に主体的に選択していきたいと思いました。この度は、このような考える機会を設けていただきありがとうございました。



医学科4年 大上 侑里子

橋本先生のユニークな研究内容と研究者としてのキャリア形成のお話の中で特に先生のサバティカルの経験が印象的でした。約1年休みをとって世界の研究所を転々とするお話から、独自の技術を持つ研究者だからこそ世界のどこでも活躍できる面白さと、またコミュニケーションをとるための英語の重要性を感じました。私達医学部生は卒業と共にMDを取得しますが、その医学知識を研究、医療工学、政策決定などの医師以外の道にも応用することができるため、自分のしたいことを考え主体的にキャリアを考える必要があることを強く意識することができました。



海外リサーチ・クラークシップ成果報告①：ジャーナルに掲載されました

海外リサーチ・クラークシップ参加後に研究活動を継続している本学学生の研究成果をご紹介します。佐々木俊秀君は筆頭著者で、長田理瑚さんは共同筆頭著者で、それぞれ論文が発表されました。ご指導を賜りました関係者の皆様に心より御礼申し上げます。

International Journal of Clinical Oncology

Integrative analysis identifies activated anti-tumor immune microenvironment in lung metastasis of pancreatic cancer
佐々木俊秀 (筆頭著者)

DOI<https://doi.org/10.1007/s10147-022-02131-x>

2022年2月10日 オンライン掲載

医学科6年 佐々木 俊秀 (消化器・総合外科学所属)

この度、肺癌肺転移における抗腫瘍免疫活性化の解明についての論文を筆頭著者として発表させて頂きました。2年次に台湾でのリサーチ・クラークシップを終えた後も、消化器・総合外科で研究活動を続けさせて頂いており、本研究はその一環として行いました。コロナ禍



で一時は大学に来ることさえ出来なくなるなど、ここに至るまでには様々な困難がありました。論文の形で研究成果を発表できたのは、皆様のお力添えがあってこそと存じます。庄 雅之教授を始めとして消化器・総合外科の先生方には、ご多忙中、夜間・休日にも厭わず丁寧にご指導頂き、心より感謝申し上げます。今回の経験を活かして、今後も研究活動に励んで参ります。

Frontiers in Cell and Developmental Biology

C9orf72-derived proline:arginine poly-dipeptides modulate cytoskeleton and mechanical stress response

長田理瑚 (共同筆頭著者)

DOI<https://doi.org/10.3389/fcell.2022.750829>

2022年3月23日 オンライン掲載

長田 理瑚 (未来基礎医学所属/2022年3月 医学科卒業)

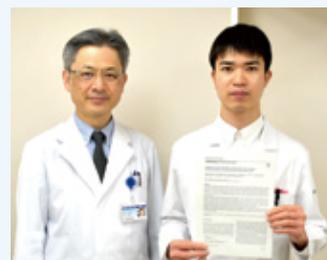
「C9orf72 遺伝子由来のプロリン：アルギニンポリジペプチドによる細胞骨格とメカニカルストレス応答の調整」に関する論文の共同筆頭著者としてご掲載いただきました。2年生時に海外リサーチ・クラークシップに応募したことがきっかけで、元々興味を持っていた筋萎縮性側索硬化症 (ALS) の研究プロジェクトに参加させていただくことができ、充実した研究活動を行うことができました。研究活動を始めた時は、研究の進め方ももちろん、論文を読むこともままならず、大変なことも多くありましたが、同時に研究の面白さも体感することができました。ご指導をいただいた、森英一朗先生、塩田智先生始め共著者の先生方、未来基礎医学の先生方にこの場をお借りし厚く御礼申し上げます。



MESSAGE

消化器・総合外科学 教授
庄 雅之

6年生の佐々木俊秀君の筆頭論文がこの度IJCOに掲載されました。自分のこと以上に嬉しく思います。本研究は、肺癌の肺転移が肝臓や腹膜転移と比較してなぜ予後がいいかという Clinical Question に対して、基礎研究によって機序の一端を明らかにした貴重なものです。佐々木君は2年生の国立台湾大学への海外リサーチ・クラークシップを契機に、帰国後も継続して学内での研究を根気強く着実に進めてきました。本論文は研究成果の一つに過ぎませんが、これまでの彼の不断の努力には本当に頭の下がる思いです。研究を指導してきた台湾大学の Yang 教授、消化器・総合外科の西和田、中川とともに、佐々木君の今後の成長とさらなる飛躍を心から楽しみにしています。



MESSAGE

未来基礎医学 准教授
森 英一朗

長田さんは、2年次に開催された海外リサクラの前に、未来基礎医学での事前実習を希望されました。長田さんがまだ2年次の春頃、私が2017年4月に奈良医大に教員として赴任したばかりの頃に、「筋萎縮性側索硬化症 (ALS) の研究に興味がある」といって教室を訪れました。あれから5年が経過しました。この間、2021年9月に Nature Communications 誌に発表した論文や、他3報の論文に共著者として積極的にプロジェクトに参画してきました。今回の論文では、共同筆頭著者としてプロジェクトの中心的役割を担い、特にプロジェクトの立ち上げに大きく貢献しました。卒後も、進まれる分野での活躍を期待しております。



国際交流センターだより vol.7

海外リサーチ・クラークシップ成果報告②：厳糧賞受賞報告

海外リサーチ・クラークシップOBとして活躍を続けている長田理瑚さんが、令和3年度卒業式で「医学科同窓会厳糧賞」を受賞しました。

長田 理瑚 (2022年3月医学科卒業)

この度は厳糧賞という栄誉ある賞を受賞することができ、誠に光栄に思います。2年時の海外リサーチ・クラークシップへの参加をきっかけに未来基礎医学で本格的な研究活動を開始しました。研究活動を始めた当初は右も左も分かりませんでしたが、未来基礎医学、脳神経内科学の先生方にご指導をいただき、多くのことを学び、研究の面白さ、奥深さを知ることができました。お世話になった先生方に受賞の報告ができることを嬉しく思います。この経験を糧に今後も精進して参ります。



留学報告：ルーヴェン・カトリック大学（ベルギー）

令和3年度医学科同窓会厳糧学術奨励賞（海外留学助成金）を受賞され、現在ベルギーに留学中の酒井和哉先生にお話を伺いました。

酒井 和哉 (前所属：輸血部) 留学期間：2021年7月～

2021年7月よりベルギーのKU Leuven, Laboratory for thrombosis research (Prof. Dr. Karen Vanhoorelbeke) にて postdoctoral fellow として勤務しております。留学先の研究室は希少な血栓症である血栓性血小板減少性紫斑病 (TTP) の基礎研究の分野で世界をリードしています。現在は日本人後天性 TTP 患者における ADAMTS13 自己抗体の抗原エピソード解析や、難治再発性後天性 TTP に対する免疫細胞療法の開発などのプロジェクトに従事しております。研究だけではなく、学部生への実験やレポート作成指導など教育に従事することもできており、非常に充実した日々を過ごしています。

留学するにあたっては COVID-19 pandemic の影響も大きかったのですが、何よりも前任者がいなかったため、留学準備から現地での生活のセットアップに本当に苦労しました。英語圏のメジャーな留学先ではありませんので、日本人のコミュニティは研究室のある Kortrijk 周辺にはありませんし、今の所ベルギーで日本人に遭遇した記憶はありません。また滞在中の給与を確保するための、留学助成の奨学金 (Grant) の獲得は留学するにあたって最大の難関でした。幸い資金源を確保することができたため、長期滞在ビザの取得した後に渡欧することができました。しかし、アパート探しや給与受け取りのための銀行口座開設、健康保険の加入など多くのことを現地の公用語であるオランダ語の公的文書でこなす必要があり、同僚に手伝ってもらいながら苦労しながら契約したのは記憶に新しいです。

“Ik hou van Belgisch bier en frietjes met mayonaise!” ベルギーと言えばチョコやワッフルが日本では有名と思いますが、ベルギービールとフライドポテトも忘れてはいけません。1000種類以上のビールと二度揚げしたフライドポテトは最高のコンビネーションです。世界遺産を有する多くの都市にも電車で1時間程度でアクセスできますので、週末は非常に贅沢なヨーロッパの風景を楽しんでいます。最後に、快く研究留学に送り出してくださった輸血部の松本教授はじめ、学内の多くの方々にこの場を借りてお礼申し上げます。



ブッシュ大統領が宿泊した Kortrijk 市内のホテルにて、左から Prof. Karen Vanhoorelbeke, Prof. Simon De Meyer, 酒井先生



近隣の観光都市 Brugge のマルクト広場にて